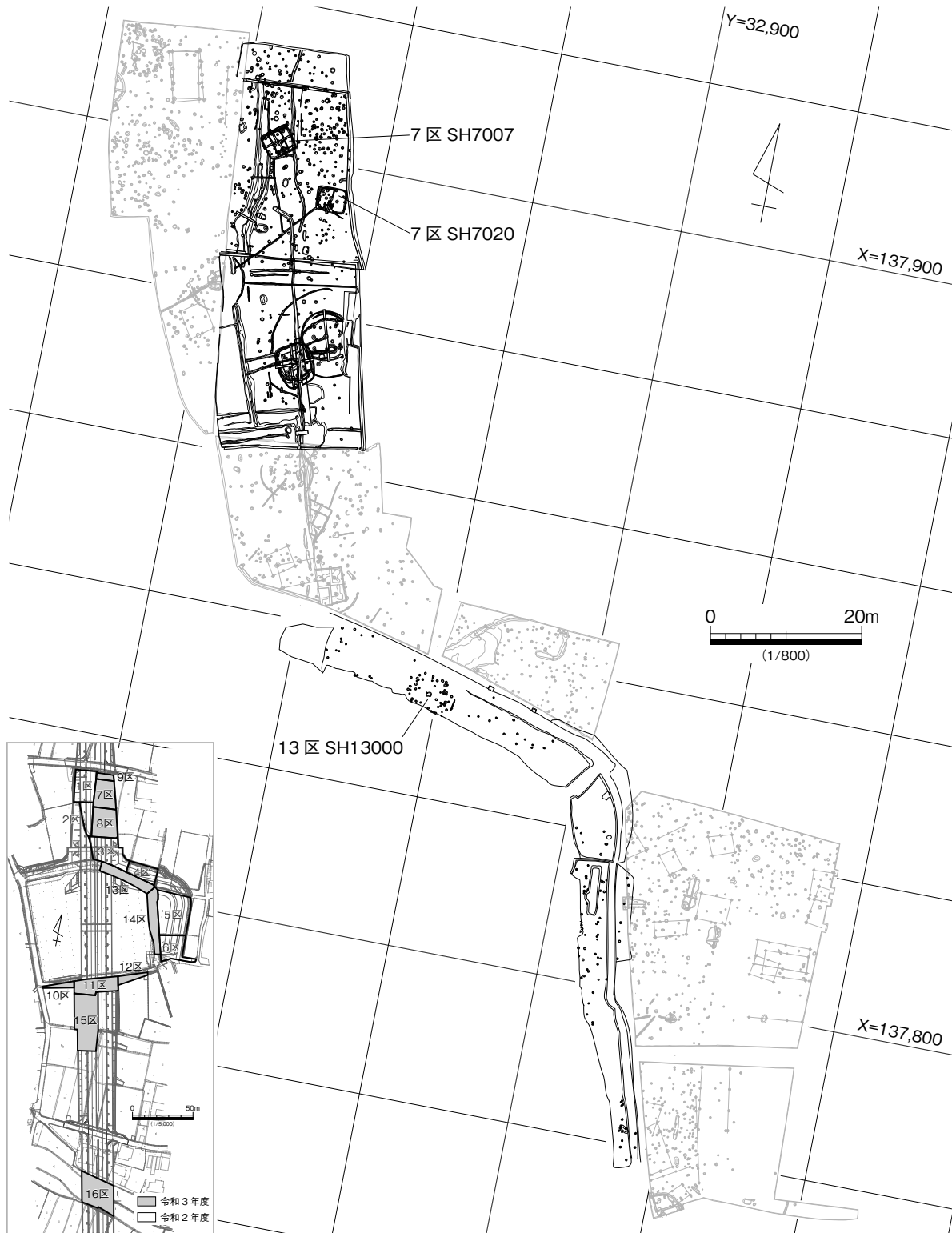


本遺跡の発掘調査は令和4年度も継続されるので、新たな調査成果や旧地形の検討結果などを踏まえて、弥生時代の岡田台地の様相や本遺跡が果たした役割について考えることが今後の課題である。

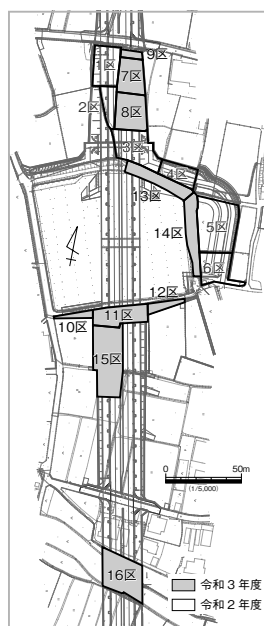
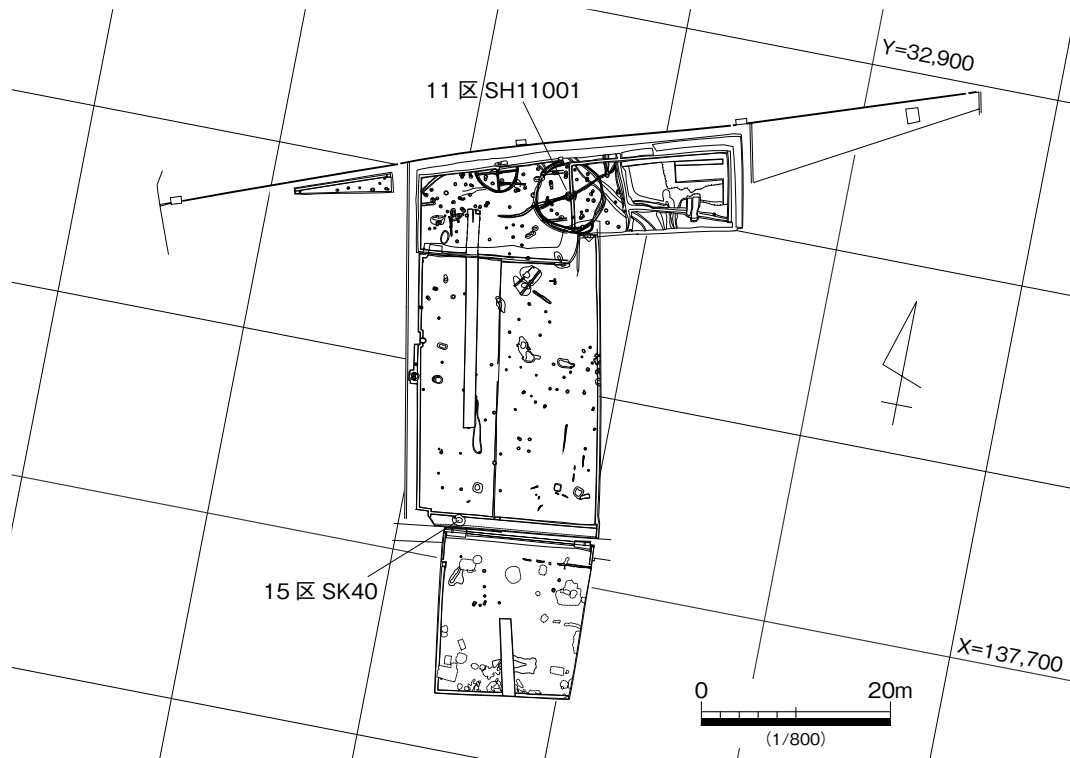
鎌倉時代～室町時代の集落跡は、昨年度確認された遺跡の北側だけでなく、中央部南寄りでも展開することが明らかになった。本遺跡から北へ約500m～1km離れた位置には、沖南遺跡、沖遺跡、名遺跡がある。丸亀平野南端部に所在するこれらの遺跡では平安時代終わりごろ～江戸時代前期にかけて集



第12図 遺構平面図1 (1/800)

落が形成され、存続する。また、条里地割の坪界溝が平安時代終わりごろ以降に掘削される。このように本遺跡の周辺地域では、平安時代終わりごろ以降に集落の形成と土地開発が進展したことがうかがえる。

このため、今後は各遺跡の実態把握と合わせて、遺跡群の関わりという観点からも本遺跡付近の地域開発について検討する必要がある。



第13図 遺構平面図2 (1/800)

おきみなみ
沖南遺跡

沖南遺跡は丸亀市飯山町上法軍寺に所在する遺跡である。調査地は丸亀平野の東部に位置し、岡田台地の下(北側)の平野に立地する。周辺には北から西に30°傾く方向を基にした条里型地割が広がっている。本遺跡の北方約300メートルには条里地割に平行する中世の溝群が検出された沖遺跡、さらに北方約500メートルには、古墳時代後期の竪穴建物跡や古代の掘立柱建物跡、水田を検出した名遺跡が存在する。

本遺跡は国道438号道路整備に伴って令和元年から調査が行われており、今年度の調査で3年度目を数える。過去の調査では、弥生時代後期の溝状遺構、古代末～中世の集落跡が検出されている。今年度の調査では、弥生時代の河川跡、中世の集落跡が検出された。



第14図 遺跡位置図 (1/25,000)

弥生時代

河川跡(オレンジと黄色で着色した部分)が検出されたのは、2区と3区の西方である。堆積状況などから自然にできた河川とみられ、蛇行しながら南方から北方へ流れている最中に複数個所で分離している。調査区の南方には、岡田台地に挟まれた谷があり、台地の上で集まった水が谷に流れ、そこから遺跡へと流れていたと考えられる。

遺物の多くは河川の上流である2区で多く出土しており、出土した土器は弥生時代後期から古墳時代前期の年代が与えられる。

中世

本遺跡の南方を東西に横断するように溝状遺構が検出された。単一の溝が横断しているのではなく、3条の溝が重複しながら存在する。いずれの溝も調査区外へ延びるため溝の全幅は不明だが、調査区内で最大5メートルの幅がある。SD1067(赤色で着色した溝)が最下層にあり、SD1034(緑色で着色した溝)とSD1041(青色で着色した溝)がほぼ併存している。深度としては、SD1041、SD1034、SD1067の順に深くなり、完掘した時点で最も深い部分は90センチの深さがあった。一部弥生時代の河川跡と重なっていることから、河川跡が途絶えてから溝が作られたものとみられる。岡田台地に挟まれた谷を流れてきた河川跡と異なり、岡田台地の上で集まった水が標高の低い遺跡の方へ流れ、溝の中に落ち込むことで集水していたと考えられる。溝からは多種多様な土器や木札、動物骨などが出土した。それらを参照すると溝群は平安時代後半から鎌倉時代に機能していたと考えられる。この溝群から北へ30メートルのところ令和2年度の調査で見つかった12世紀から13世紀前半に開削、埋没したと考えられる坪界溝がある。近隣の発掘調査が待たれるが、令和2年度に見つかった坪界溝と今年度見つかった溝群が合流する可能性が指摘できる。

溝跡以外の中世の遺構として、溝跡群から北へ約9メートル離れたところで4棟の掘立柱建物跡が重